

Croft, W. (1998)
Linguistic evidence and mental representation.
Cognitive Linguistics, 9(2), 151-173.

Rep. 小野

1 イントロダクション

本論文では次のように論じる: 心的表象の「正しい」モデルは、内観的な言語学的証拠だけでは決定できない。

2 心的表象の基礎的モデル

言語形式 a が、意味論的に区別可能な2つの用法 $U1$ と $U2$ を持っている場合を考えよう (例, *mouth* — 人間の口, 入れ物の口)。この言語学的事実に整合する心的表象のモデルには以下のものがある:

独立のエントリモデル: 表象 $[a/U1]$ と表象 $[a/U2]$ が独立に存在している。
多義性モデル: 表象 $[a/U1]$ と表象 $[a/U2]$ が独立に存在しているが、 $U1$ と $U2$ は意味ネットワーク内でリンクしている。話者は a の形式的な同一性を認識している。
派生性モデル: 表象 $[a/U1]$ が存在し、 $(a/U2)$ は言語特定の規則 (操作, スキーマ) によって派生される (i.e. on the fly で計算される)。
語用論的モデル: 表象 $[a/U]$ が存在し、 $(a/U1)$ と $(a/U2)$ は一般的認知原理 (文法からは独立) によって派生される。

次に、言語形式 a と形式的に関連している ab が、それぞれ用法 $U1$, $U2$ を持っている場合を考えよう (例, *produce* と *próduce*; *sing* と *singer*; *write* と *write down*)。

独立のエントリモデル: 表象 $[a/U1]$ と表象 $[ab/U2]$ が独立に存在している。
多義性モデル: 表象 $[a/U1]$ と表象 $[ab/U2]$ が独立に存在しているが、 a と ab は形式ネットワーク内でリンクしている。
派生性モデル: 表象 $[a/U1]$ が存在し、 $(ab/U2)$ は言語特定の規則 (操作, スキーマ) によって派生される (例, 「 b の付加は意味 $U1$ から意味 $U2$ を派生させる」)。
語用論的モデル: 表象 $[a/U1]$ と $[b/W]$ が存在する。文脈と一般的認知原理に基づき、 $U1+W$ から $U2$ が派生される。

上から下に向かって特定の—一般的である。

3 冗長性(規則/リスト)の誤謬, 一般性の誤謬

(特定のモデルの根拠無き排除) 認知言語学者は, 多くの形式主義者は多義性モデルを根拠無く排除している, と批判する。Langacker はこれを規則/リストの誤謬と呼んでいる。私はこれを冗長性の誤謬と呼びたい。というのは, それが<冗長な表象は心理学的に不可能だ>という誤った想定に基づいているからだ。

いっぽう認知言語学者は, 独立的エントリモデルを根拠無く排除することが多い。

(特定の原理の根拠無き使用) 形式主義者は, 単純さやエレガントさといった理由に基づいて, 可能な限り一般的なモデルを採用しようとしてきた(一般性の誤謬)。

認知言語学者もまた, 一般性の誤謬を犯しがちであった。すなわち, 文法的要素が意味を失っていないことを示そうとするあまり, その要素について語用論的モデルを採ることが多かった。

4 内観的な言語学的証拠と, 心的表象のモデルの排除

4.1 語用論的モデルの排除

語用論的モデルが排除できるのは, 言語間比較において, ある言語で(a/U1)と(a/U2)が, 別の言語で(a/U1)と(a/U3)が示された場合である。(例, 給水塔を英語では *water tower* というが, フランス語では *château d'eau* という。)

(顕著性の役割) 語用論的モデルと派生性モデルとを区別する際に問題になるのは, Clark(1996)のいう非慣習的協調装置の役割である。

話し手と聞き手は, 話し手がなにを意味しようとしているかについての合意に関して協調しようとする。そこで用いられる装置のひとつが慣習だが, その他に非慣習的装置(共同知覚や認知的顕著性)も用いられる。

一般的な制約に基づいて, 文脈におけるもっとも顕著な意味を選択するコンストラクションを, 文脈的コンストラクションと呼ぶ(例, [do a Name] ... *do a Napoleon*)。Clark(1979)は, 複合名詞を文脈的コンストラクションとして分析している(i.e. その意味は非慣習的協調装置によって決まる)。

文脈的コンストラクションに関しては, 同じ共有知識が与えられればどんな聞き手でも同じ意味に到達すると仮定されている。とはいえ, 文脈的コンストラクションが遍在しているため, 言語間比較は難しくなる。語用論的原理は同じでも, 顕著性は違うかもしれないからである。(例, フランス語で給水塔のことを *château d'eau* というのは, フランス語では *château* の顕著性が高いからかもしれない。)このため, 言語とは独立に文化的顕著性を分析することが必要になる。

(語用論的モデルが可能であっても) ... それだけが可能なモデルだとはいえない。

- (1) a. *I attached the pipe with solder.*
 b. *I attached the pipe with screws.*

上の例での *with* のちがいを(接着か機械的か)を、多くの言語学者は語用論的に分析する。しかし、(1b)での *with* の用法は慣習的に確立しているのかもしれないし(多義性モデル)、*with* の一般的な意味から派生しているのかもしれない(派生性モデル)。心理言語学的実験が必要である。

4.2 派生性モデルの排除

派生性モデルは、U1-U2間の派生関係にある程度の意味論的不規則性が示されれば(i.e. U2にユニークな面があれば)排除される。

以下の中間的立場が可能である:

- あるメンバーは規則に基づき派生され、他のメンバーは独立に表象されている。例, [the Adj] は Adj を持つ人を表し (*the happy*), そのなかのいくつかのメンバーは慣習的に確立している (*the rich*)。
- ある形式が、リスト化された意味と、派生的な意味とを持っている。例, *running* は「ランニング」と「走ること」とを意味する。

派生性モデルを支持し他のモデルを排除する証拠として生産性が挙げられることが多いが、見かけ上規則的につくられた形式が独立に貯蔵されている可能性もある。

さらに、次の中間的立場も可能である:

臨時使用モデル：表象 [a/U1] が存在する。(a/U2) と (ab/U2) は、文脈敏感な一般的認知原理に基づき U1 から派生される。例, 可算名詞 *car* から集合名詞用法が派生: *There was a huge Buick there; just acres of car.*

4.3 多義性モデルの排除

多義性モデルは、[a/U1] と [a/U2] の間で a が異なることを示せば排除できる。例, **I'm gonna the park*; 哺乳類の *mouse* の複数形は *mouses* ではなく *mice*。

以下の中間的立場が可能である:

複雑な形式的関係モデル：表象 [a/U1] と [ab/U2] が存在する。a-ab間には形式的規則でリンクされているが、U1-U2間に意味論的規則によるリンクはない。(例は省略)

a-ab間の形式的な関係の定式化に成功したとしても、多義性モデルの排除はできないことに注意。

5 結論

内観的な言語学的データにおける特異性を示すことで、心的表象についての一般的なモデルを排除することはできる。しかし、一般性を示すことで、特定のモデルを排除することはできない。

それでは、心的表象についてのモデルを決定するためにはどのようなデータを用いればよいのか。いくつかの例を示そう。

識別性 話し手が2つの用法を識別しているならば、語用論的モデルは排除される。

Sandra&Rice(1995): 文のグルーピングと文間の類似性判断課題。前置詞の意味のちがいが識別された。 派生性モデル or 多義性モデルを支持。

Croft(1995): *eat*のコーパス研究。comitative arg. は‘dine’用法のみに出現し‘consume’用法には出現しない。(Jack ate lunch with Jillという発話はあるが、Jack ate a pizza with Jillという発話はない。)

慣習性 ある用法が慣習的に確立しているなら、派生性モデル・語用論的モデルが排除される。

Gibbs(1994): 間接発話行為の研究。字義的な意味よりも反応時間が速い。 派生性モデルを排除。

コーパスにおける頻度は慣習性の指標となる。

関連性 2つの用法が関連していないなら、多義性モデルは排除される。逆に、関連しているなら、独立的エントリモデルが排除される。

Ryder(1994): 新奇な複合名詞の定義課題。慣習的複合語の分布に影響される。 派生モデルを支持。

Caranazza&Gruber(1976): *line, run*についての研究。文間の類似性判断, 典型性判断。多様な用法がお互いに関連している。 多義性モデルを支持。

プライミング効果の研究。

- Swinney(1979,1882);Seidenberg et al.(1982): 文脈中の同音異義語 (e.g. *straw*) をプライムとした場合, 0-200ms ではどちらの意味も活性化, その後は適切な意味のみが活性化。
- Williams(1992): 多義語 (*firm*) をプライムとした場合は, 不適切な意味は 200ms 以降でも活性化。
- Marslen-Wilson&Waksler(1993): 派生形の研究。意味論的に透明かどうかで効果が異なる。

[読後の感想]

最近のメタファ理解研究において注目されたトピックのひとつは、認知言語学における主張の心理学的実在性の検証、とりわけイメージスキーマの実在性の問題です。

イメージスキーマとは、知覚・経験に基づく抽象的なイメージの認知図式で、外的世界の認識を体系づけているものであると考えられています。たとえば、「タンクに水を入れた」という表現は、容器のイメージスキーマに支えられており、「彼女は劇団にはいった」という表現は、容器のイメージスキーマの社会的空間への拡張に支えられている、と考えられています。認知言語学の分野では、いくつかのイメージスキーマの存在を仮定することで、個々の言語形式とその意味との関係を体系づけようという試みが盛んです。

こうした議論を背景に、認知心理学的メタファ研究においては、イメージスキーマの心的実在性を、オンライン課題を用いて示そうとする試みがおこなわれてきました。たとえば中本(2000)はストループ的パラダイムを用い、多-少などの概念が上-下の空間判断に影響することを示しました。この効果が生じたのは、多-少という概念が空間的方向づけのイメージスキーマに支えられているせいだ、という論法です。

しかし、ココダケノ話デスガ、こうした研究が果たして、イメージスキーマの心的実在性を示したことになるのか、という疑問を、漠然と抱えています。もしもイメージスキーマというアイデアを、言語学者に教えてもらっていなかったら、認知心理学者はきっと、同じ実験結果を、もっと単純なやりかたで(意味ネットワークにおける促進と抑制という考え方で)説明していたのではないか、と思うからです。

というわけで、認知言語学者であるいっぽう実験研究にも強い(たぶん)Croft が、認知心理学の役割をどう考えているのだろうか、という関心から、この論文を読みました。ごらんのように、実験研究の役割について非常に肯定的な評価をしているので、とても意外でした。うーむ。

おわり